令和元年「受験記」刊行に寄せて（６月）

卒業生の皆さんのご協力の下に、今年も岡山朝日高等学校『受験記』を刊行することができました。心よりお礼申し上げます。

卒業生の皆さんは、高い志をもって「入れる大学」ではなく、「入るべき大学」を目指して努力し続け、昨年度入試も素晴らしい成果をあげました。

現在の岡山朝日高校は、全国屈指の進学校としての地位を築くとともに、卒業生が、自分の将来とともに社会の将来にも責任を持とうとする高い志のもと、その輝きは一人一人異なりつつも様々な分野で社会に貢献しています。

さて、出身高校こそが採用段階で有能な人材かどうかを見抜く重要な判断材料になる、つまり、出身高校がどこで、どのような教育を受けてきたかが重要であるとする話を聞くことが増えました。例えば、経済雑誌で、「大事なのは高校」といった特集が組まれることがあります。

「たくましさ」等社会が真に求める力を評価するには、出身高校を見た方がいいのではないか、社会で役立つ力の育成は、高校の学びにその基礎があるのではないか、ということに企業が気づきはじめたと言われています。人間としての幅広い資質能力の育成を担う高校での学びは、社会でたくましく生きていく基礎をつくる極めて重要な意味をもっており、伝統校では、これまでもち続けていた文武両道等の教育理念を、時代が求める新しい力として再評価しはじめているというのです。

このような考え方と受験に向けて努力することは、相反するものではありません。近年、教育関係の書籍等では、世界スタンダードの基礎教養として、日本の各教科・科目の高校教科書をしっかりと理解していることの重要性が述べられています。また、入試において思考力・判断力・表現力を問う問題が増加してきています。すなわち、大学入試がゴールではなく、高校での学びや大学入試と大学入学後や大学の向こう側の社会との繋がりが求められているのです。受験勉強に「意味」はあるのであり、「意味」を見出す必要があるというのです。

この『受験記』には、勉学はもちろん、部活動や生徒会活動あるいは社会貢献活動などに対してひたむきに努力し、その結果勝ち得た喜びや達成感など、苦しみながら多くの障壁を乗り越えていった卒業生の体験が綴られています。上記の、高校での学びの全体像や大学入学後の自分の在り方が、一人一人の体験とことばで語られています。必ずや、この岡山朝日高校で学ぶ皆さんにとって大きな勇気や示唆を与えてくれることでしょう。

在校生の皆さんには、この『受験記』から多くのことを学び、大学の向こう側を意識した「高い志」つまり自己の目標に向かって邁進して欲しいと思います。

最後になりましたが、『受験記』に寄稿してくださった卒業生の皆さんが、健康でますます活躍されますことをお祈りしております。

（県立岡山朝日高等学校　校長　竹田義宣）